

サブカルチャーと政治の時代

——張小虹『フェイク・タイワン』を読む

三木 直大



張小虹著・橋本恭子訳
フェイク・タイワン
偽りの台湾から
偽りのグローバルゼーションへ

A5判 304頁
東方書店
[本体 3,000円 + 税]

張小虹のこの本の中国語初版は、二〇〇七年。全五章で構成されるが、出版時に加えられた序章にあたる第一章を除く四編は、二〇〇四年から二〇〇六年にかけて、それぞれ単独の論文として台湾の国際シンポジウムや学術誌などで発表されたものである。その点では、昨年の日本での翻訳出版のほぼ一〇年前の論考ということになる。何もこの一〇年で、この本に収録された論考が古びたと言いたいのではない。

この本を読みすすめるためには、どうしてもそれが書かれた時代を考えないわけにはいかないのである。執筆時期ときわめて密接した題材をこの本は扱っていて、それは張小虹の本のほとんどがそうなのだが、文学作品から始まり映画や音楽、ファッションなどなど、台湾文化の同時代状況論になっているからだ。時代を読み解きながら、そこから普遍的な場

所に抜け出ていこうとするのが、張小虹の方法なのである。この本全体を構成するグローバルイズムとローカリティという二元対立の脱構築をめぐる論述はそれゆえに説得力を持つし、「真」と「偽」の脱構築というテーマは台湾という可能性の国家のありかたと切り離すことはできない。そしてドゥルーズ／ガタリを援用する論述のキーワード「脱領土化」は、脱植民地化・脱帝国化・脱冷戦化の課題を総体的に関連付けるようにして使用されていると考ええると、著者の目指しているものが見えてくる。

原著の中国語書名は「假全球化」。英文書名のまま「フェイク・グローバルゼーション」としてもよかったと思うが、日本語訳では「フェイク・タイワン」にして捻りを効かせてある。これは台湾を表に出すことで、台湾ファンにこの本を手

取ってもらおうという狙いもありそうだ。しかし最近増えているらしい「台湾虜虜」が書店に並んでいる。この本を見て、「フエイクタイワン」とは何か、「偽台湾人」とは何か、それは台湾（人）を偽る（騙る）人のことで（どちらなんだ）、それを批判しているのだろうかと思つて手に取つたりすると、裏切られた気持ちになるだけではなく、怒りだすかもしれない。何故なら、著者は「『台湾人』への回帰を回避する」と言うのだから。

本質主義的な台湾なんてないのだ、本質主義的なナショナルアイデンティティを批判的に乗り越えることが大切なのだというのが、この著者の立場なのである。そして「真のグローバリズム」であれ「偽のグローバリズム」であれ、いずれそれはナショナルアイデンティティを権力化するか感情化するものなのだから、何であれそのことを見極めなければ前に進めない。たとえば「商品の『鏡像』と植民地の『鏡像』の相互反射」と「経済・政治・文化・心理上の複雑な絡み合い」が氾濫する偽ルイ・ヴィトン。「日本がイメージするヨーロッパを台湾がイメージする」メイド・イン・タイワンのこの偽造品（一七・一八頁）についてなら、ここでは偽のグローバリゼーションとグローバリゼーションは二項対立するものではない。偽のグローバリゼーションとは「グローバル資本主義

の『内輪もめ』であり、偽造コピーをグローバル・ブランドのトレンド意識から受ける『支配』とみなすこと、および『グローバル・ブランド中心主義』に支配されることへの『反撃』とみなすことの間の一種の矛盾」（二二一頁）なのである。つまり偽ルイ・ヴィトンとはポストコロニアルの時代の「偽造の越境（する）散種（J・デリダ）」（二四頁）であり、消費者が「いかに国際的労働分業の政治経済的構造の尻馬に乗っているかを内側から暴露」（同）する「遅れてきたモダン・ティ・ブランド」（二八頁）なのだ（第三章）といった具合にである。

さて本書全体の構成だが、著者は「後記」でこの本は「『中国語映画』の『偽』、『高級ブランド』の『偽』、『台湾シヤツ』の『偽』であれ、あるいは『台客』『台妹』の『偽』であれ、いずれも『偽』によってダイナミックで流動的な『脱領土化』のプロセスを現前させ、安定して閉ざされたアイデンティティである『中国語（原文は華語）映画』『高級ブランド』『国民服』『台湾人』への回帰を回避し、様々な連結・転換・反転・構築のエネルギーを放出することによって、『根源』『理念』や『母型』といった前提を翻し、『虚偽の力』をグローバルに離散させようとした」（二六五頁）ものだともとめている。いっけん難しそうだが、要するにサブカルチャー論であつて（だからと言って読みやすくなるわけではないのだが）、この本は

様々な関心から読むことができる。読者は何も最初から頁を順番に繰ることはない。武俠映画論としての『グリーン・ディステイニ』論として読む(第二章)。偽造品のルイ・ヴィトンのブランド論として読む(第三章)。APECの首脳会議ファクションショーから見るポストコロニアルな国家論として読む(第四章)。「台客」という語の検討を契機とする台湾ヒップホップ論やファクション論として読む(第五章)といったように、関心の赴くところから読み始めればよい。

そう考えると、著者と対話をしてみたくなる余裕も生じてくる。筆者もそうで、たとえば第二章についてなら、『グリーン・ディステイニ』(二〇〇〇)の武俠アクションがいかによくできているかについての細微をつくした理論的論述にはひきこまれるが、ところでは胡金銓が構築したとされる武俠

映画の文法を否定するかのようにストーリーに「天下」を持ち込んだ張芸謀『HERO』(二〇〇三)と、「中国性」のあり方がどう違うのかについては触れられないまま終わってしまった。著者は著者の思惑があつて「中国の氣論」と「空中輕功」の身体論に深く入っていくのだが、むしろこちらが考えてみたのは『グリーン』の非政治性と『HERO』の政治性をめぐるアイデンティティ・ポリティクスについてであつて、そこでの「偽中国性」の問題を論じてほしいのに、それはスルーされてしまふので欲求不満を感じてしまふといったようにである――

『感覚結構』(聯合文学、二〇〇五)の「江湖潛意識」などは、それは他でやっているからというのものもあるだろうけど。

ところで第五章は垂水千恵氏による先訳があるのだが(「越境するテキスト」、研文出版、二〇〇八)、垂水はこの論文につい

ことばの散歩道Ⅶ ―成語・ことわざ雑記―

上野恵司 著 軽妙な筆致の日中言語文化比較エッセイ60話と親族名称をめぐるコラム「気になる日本語」60編。 ■1600円

□新刊□

呉志剛先生の中国語発音教室

上野恵司 監修 呉志剛 著 声調の組合せ徹底練習
四声の組合せのリズム練習とイメーシ訓練を取り入れ、音節のつなぎの滑らかな洗練された発音のコツを身につける。 ■2200円

CD-ROM付

退職老人の日本語教育

―日中協同教育in天津―

東晋次 著 日本語授業の実際や独自の指導方法を提示。中国人・中国文化そのものを理解したいという熱意に貫かれた一冊。 ■833円

北京の合歓の花

―私と中国・中国語―

高橋俊隆 著 四十余年二五〇回に及ぶ訪中歴の中で、商社マンの目に映った中国と自らの中国語学習の軌跡を綴る。 ■1800円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

て、「アイデンティティ・ポリテイクスの袋小路に入り込むことを避け、『似不像』というコンセプトを投入することで(中略)、ポストモダンの地図を描こうと腐心している」(前掲書四一四頁)と評している(「似不像」は「似ているようで似ていない」といった意味で、張小虹が作り出した理論概念である)。その「腐心」が張小虹言うところの論述の「ダンス」の意味合いでもあるが、第五章には一九九〇年代前半期に台湾で出版された雑誌『島嶼辺縁』の「偽台湾人」特集への言及がある。張小虹はこの雑誌の編集委員の一人だった。台湾の一九九〇年代前半期は、民主化運動の成果としての戒厳令解除の次に、台湾社会をどのようなものとして構想していくかの政治の季節だった。

この本のメインテーマである「偽」は、「国民」という名によって権力化され内面化される「同質化」へのアンチテーゼである。「真」と「偽」であれ、「グローバル」と「ローカル」であれ、本質主義的な二項対立などありえない。「境界の増殖」「越境散種」「対内識別」「対外識別」などなど、「境界」はこの台湾文化論の論述装置でもある。その意味でも、この本の原点は『島嶼辺縁』の「偽台湾人特集」に見いだせる。あの時代に『島嶼辺縁』は、「国民統合」へ向けて「国民」を均質化していく台湾ナショナルリズムと、そのなかで本質主

義的な政治がマイノリティを利用し固定化していくことに疑義を提示する。雑誌『島嶼辺縁』については、筆者の「雑誌『島嶼辺縁』と一九九〇年代前半期台湾の文化論」(『アジアから考える』、有志社、二〇一七)を参照していただければ幸いだ。第五章には「偽台湾人」と同じくもうひとつの「脱領土化」の大きな理論軸であるジェンダー論があわせて展開されている。

著者は時代の表象を読み解くために、様々な文化理論概念を援用し駆使し創出しというスタイルで論述をすすめる。台湾で英文科の教授が中国語で論文を書くのは何故かを問い、「台湾国語」とは何か(第五章)を問い、自分の言葉は「常に中英の入り混じった不純なもの」だと述べ、そして「中国語と英語がお互いの『間』で異質の流動と変化を生」み、それは「想像であり、創造の可能性」であり「思考の革命」だと、自らの文体を説明する(自序)。筆者も「クイア・ファミリー・ロマンス(怪胎家庭羅曼史)」(『台湾セクシュアルマイノリティ文学』4、作品社、二〇〇九)の翻訳を手掛けたことがあるが、その論述のダイナミズムをさらに日本語に置き換えるのは魅力的な作業でありつつ、一筋縄ではいかない。いつの間にか著者といっしょに「ダンス」を踊りながら、足の運びがおぼつかなくなるときがある。

そんなときどうするか。この本ではその象徴のような作業が、詳細な「訳注」になっている。これが実に丁寧だし、さらに用語や人名の索引もついていて、読みとくための手掛かりを与えてくれる。たとえば第一章の訳注(6)は、著者が援用するドゥルーズの『差異と反復』に登場する概念を、フランス語原文／英訳／中国語訳／日本語訳で対照表を作り、著者が参照した英訳本の誤訳を指摘し、それを著者と議論したうえで日本語の訳語を決定したことの説明になっている。翻訳が「偽」の翻訳となって誤読と混乱を生じさせないための配慮で、こうした緻密な作業がなければこの翻訳書自体が第三章のルイ・ヴィトンの「本物」と「偽造品」のようなもので、それこそ著者が読み解こうとした時代の台湾社会のポストコロニアルな文化の錯綜から、読者は抜け出せないままになったかもしれない。

この本の収録論文の初稿が発表されたのは、第二次陳水扁總統時代。二〇〇四年には台湾独立を問う最初の公民投票があり、そして總統選での陳水扁の再選があった。そのなかで対抗軸としての国民党は親中華人民共和國路線を展開している。陳水扁政権は国連への「台湾」名義での参加申請の準備をすすめるが、二〇〇七年に却下される。一方で總統親族のインサイダー取引や不正経理問題などが表面化し、政権批判

が吹き荒れる。台湾が民主化を進めるなかでの混乱の時代である。その時代状況をどう読み解き、どこに向かって進んでいけばよいのか、その思いがこの本に収録された論考を成立させている。そうした政治の時代のなかでの張小虹の立ち位置の模索がこの本を覆っていて、それがこの本を東アジアの現在の課題に接続させているのである。

(みき・なおたけ 前・広島大学)

INFORMATION

台湾学術文化研究叢書(東方書店刊)

『フェイクタイワン』

偽りの台湾から偽りのグローバリゼーションへ』

張小虹著／橋本恭子訳

A5判 三〇四頁 本体三、〇〇〇円

『抑圧されたモダニティ 清末小説新論』

王徳威著／神谷まり子・上原かおり訳

A5判 五二八頁 本体五、〇〇〇円

『族群 現代台湾のエスニック・イマジネーション』

王甫昌著／松葉隼・洪郁如訳

A5判 一九二頁 本体二、五〇〇円